



例年踏襲は衰退

帝京大学小学校 校長 石井卓之

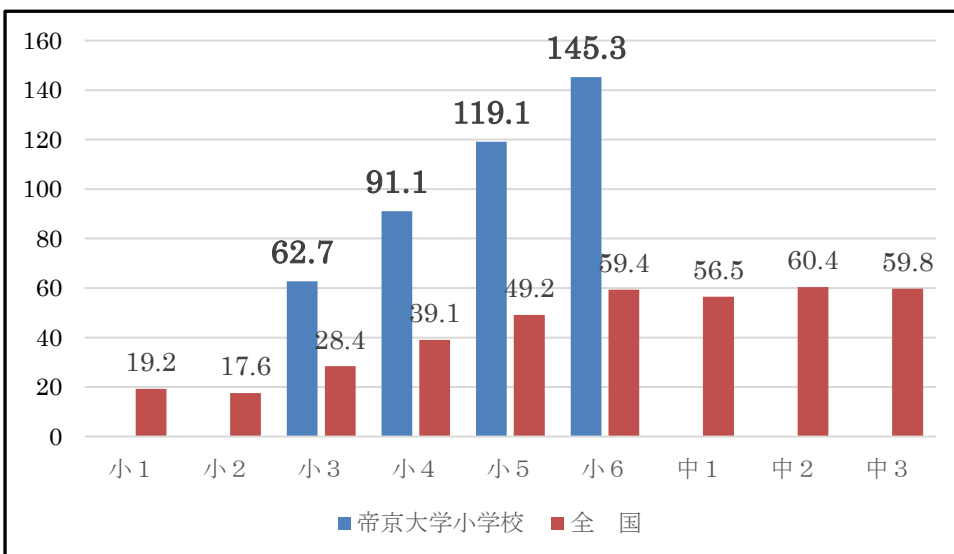
新年、明けましておめでとうございます。学校では、次年度の計画を立案する3学期が始まります。

「例年踏襲は衰退」は私が校長になってから常に掲げている学校経営の根幹であり、自分自身の目標でもあります。「例年通り」は新しいことを始めるために必要な調整や煩わしさがなく、経営的には楽な面が数多くあります。しかし、例年が当たり前になった学校組織では、教育活動のクオリティーは間違いなく低下していき、教員の情熱も停滞します。伝統は大切にしながらも、時代に即した新たな取り組みをプラスしていくことが必要です。来年度も新たな取り組みを実施し、教育の質の向上を図っていきます。

例えば次年度の3・4年生では、コロナ禍のセカンドスクールを新たな形で開始します。多摩市が八ヶ岳にもっている施設を丸ごと貸し切り（部外者が宿泊しないので感染防止対策が強化できます）、2学年が同じ日程で縦割りを取り入れながら進めていきます。引率の教員数が増えることで、子どもたちの興味・関心に合わせた多様なプログラムの実施が可能となります。2泊3日から開始し、やがては4年生を3泊4日にすることで、より発達段階に合った教育活動もできると考えています。2023年度は手探りの年となりますが、積み重ねることで帝京大学小学校独自の課題解決型の自然体験活動ができあがり、里山プロジェクトとの連動もあるかもしれません。

3年生以上の1人1台のiPadとデジタルシチズンシップを基本とした本校のICT教育の成果の一端として、子どもたちのタイピング能力がどうなっているのかが気になっていました。そこで、担当者にスキルテストの実施と結果のまとめを依頼しました（2022年12月調査）。

比較として、本校が情報モラル教育を委託している教育ネットが実施した全国調査の結果を活用しました。（2022年4月～9月実施）。表から分かるように、3年生で約2.2倍、6年生で約2.4倍となっています。特に3年生は、専用の端末を持ってから9ヶ月で身に付けたスキルです。（一般的な事務職では、1分間に



80文字程度のスキルが求められているようです。）

学習での活用も学年が上がるとに従って、「道具」になりつつあります。ノートを使う子、タッチペンやキーボードを活用する子など、教科やその単元での自己決定も進んでいます。その一方、使い方のトラブルが起きています。そこを単なる指導ではなく、子どもと一緒にどう解決していくのが、重要となっていきます。

【1分間のタイピング文字数の本校と全国と比較】